

ぼうけん 冒険への旅立ち

「おはよう、お父さん。ヤッター！ 今日からぼくはボーイスカウトだ。」そう、今日はぼくが待ちに待った特別な日、ぼくがボーイスカウトに入隊する日なんだ。

ぼくが初めてボーイスカウトに出会ったのは、去年の夏休みのある日、お父さんと近くの山に虫採りに行ったときのこと。それは本当に暑い日で、青空の山の向こうに真っ白な入道雲があったのが印象的だった。あたりは蝉の大きな鳴き声でお父さんとの会話もなかなか聞き取りにくかった。

虫を探しながら山間の川沿いの道を歩いていると、楽しそうな声が聞こえてくる。ぼくはなんだか気になった。そしてその道を歩いていくと、ぼくより少し大きなお兄さんたちが楽しそうにキャンプをしていた。三角形のテントに、竹で作ったテーブルのようなものもある。木の丸太でできた塔の上から旗をふっている。ぼくはとても興味をもってお父さんに聞いてみた。「お父さん、あれなあに？」

お父さんは「あれはボーイスカウトといって、キャンプをしてるんだ。お父さんも子供のころはあこがれていたな。」とぼくに教えてくれた。

その日以来、彼らの楽しそうな姿を忘れられずにいたぼくに、友だちのヒサシがある日「俺さ、このあいだボーイスカウトっていうのに入ったんだ。ハイキングとかキャンプに行けるんで楽しみなんだ。」と話しかけてきた。ぼくは思わずヒサシに「ぼくもいっしょにやってみたい。」とその場でお願いしていた。

その後、ヒサシは、ぼくのことをボーイスカウトのリーダーに話してくれたみたいで、今度の日曜日に集会があるから見学に来ないかと誘ってくれた。ぼくがそのことをお父さんに言うと、「いっしょに行ってあげるよ。」と言ってくれた。

とうとうボーイスカウトに行けるんだと、ぼくは本当にうれしかった。お父さんと一緒に集会に行くと、リーダーがぼくたちにボーイスカウトのことをたくさん教えてくれた。ロープの結び方とか定規を使わない物の長さのはかり方とか、ぼくは本当に楽しかった。何より一番楽しかったのは、見学に行ったぼくも一緒になってゲームをしたことだ。ぼくが入ったのはヒサシと同じ班だった。ゲームでは一番になれなくてくやしかった。一方、一番になった班はゲームの賞をもらっていて、とてもうらやましかった。

リーダーは、「きみがボーイスカウトになるには、すぐに活動に参加できるけど、活動に必要な最低限のことができるようになったら、『ちかい』をたてないといけないんだ」と言った。ぼくが「ちかい」って何かをたずねると、リーダーは「ちかい」とは自分で自分にしっかりとボーイスカウトをすること、ボーイスカウトの「おきて」を守ってみんなの役に立てるように努力することを誓うことなんだと教えてくれた。

お父さんもボーイスカウトに入ることを応援してくれて、ぼくにボーイスカウトのハンドブックを買ってくれた。ハンドブックに書いてあるものを見ながら必要なものを買揃えた。ボーイスカウトのユニフォーム、帽子、ロープやコンパス。初めて見るものもありドキドキした。翌々週の活動から参加に加わり、隊のきまりやロープ結びを覚えたり、募金活動にも参加をしたりした。そして、基本的な課目をクリアしたことをリーダーから教えられた。

最初の集会から2カ月後の集会。夕方の薄暗くなってきた近所の神社の境内で、ぼくは「ちかい」をたてた。左手で隊旗をつかみ、右手でスカウトのサインをして少し緊張したけれど、覚えた「ちかい」と「おきて」をうまく言えたように思った。たいまつに照らされたリーダーの顔はたくましくかっこよかった。そしてなんだかうれしそうにも思えた。ぼくは隊のみんなに祝福してもらった。

ぼくは本当にうれしかった。なんだか少し大人になったようでとても自分が誇らしかった。

今日のこの日が、ぼくにとって本当にボーイスカウトになった誕生日なんだとリーダーに教えてもらった。



マサヒロ

冒険の仲間

ぼくはマサヒロ、ヤマバト班の8番スカウトだ。入隊して3ヶ月、ついこのあいだ「ちかい」をたてて初級スカウトになったばかり。このごろやっとユニフォームが似合ってきて、ユニフォームを着ている自分のことがこよこよ思えてきた。

今日は、ヤマバト班の班集会で近所の山のふもとにある公園に向かうところだ。「ヒサシ、班集会に行こう。」とぼくは、ヒサシの家に誘いに行った。ヒサシは、ぼくと同じ班でぼくをボーイスカウトに紹介してくれた恩人である。おっちょこちょいでお調子者だが憎めないやつだ。

公園に着くと先に班長が待っていた。「班長、おはようございます!」ぼくらは、班長に挨拶をした。班長の名前はキムラくん、中学3年生だ。背が高く、優しくてものしり。ボーイスカウトの進級では菊スカウトだ。誰よりも頼りになるぼくのあこがれの人だ。

続いて来たのは、次長のヒデトくん、4番スカウトのエミさん、2人は兄妹である。「班長、おはようございます。お兄ちゃんが、用意が遅いので遅くなりました。ごめんなさい。」「エミ、何言ってんだよ。」「おいおい兄妹ゲンカはやめなよ。ヒデト、しっかり頼むぞ。」

班長と次長は同じ歳で、中学のクラスも部活も同じで、幼稚園からの幼なじみだそう。

最後に中学2年生のエミさんと同じ歳のマコトくん、中学1年生のシンイチくんとミドリさんが3人でやってきた。「みんな、おはようございます。」これがヤマバト班のメンバー全員である。

班長は班がまとまるように、いつも班のメンバーのことを気にかけてくれている。班のメンバーも班長のことを信頼している。班のメンバーは、その得意な分野でそれぞれの班の役目を持っている。

班長のキムラくんは天才肌で班のまとめ役、次長のヒデトくんは、実は努力家で見えないところで班長の補佐をしている縁の下での力持ち。3番のマコトくんは、計算が得意で几帳面な班の会計係、4番スカウトのエミさんはしっかり者でそつがない安全係である。5番のミドリさんは、班のアイドルでいつもやさしく草木も大切にしているので環境係、6番のシンイチくんは、まめで気が利く力持ちで頼りになる備品係、7番のヒサシは、お調子者で班のムードメーカーでレクリエーション係だ。8番スカウトのぼくは、記録係を任命された。

ぼくは、班のみんなのために記録係を一生けんめいがんばって、班の役に立とうと心にちかった。

これまでの班集会では、みんながぼくのために、ぼくが初級スカウト章を取れるように技能を教えてくれて、本当に班の仲間は頼りになると思った。次長のヒデトくんがぼくにロープワークを教えてくれて、ミドリさんとシンイチくんは国旗の掲揚を教えてくれた。班の規律なんかも班長がやさしくぼくに教えてくれた。班には班だけの秘密のサインがあることも教えてくれた。それは、班呼というそうだ。ヤマバト班の班呼はヤマバトの鳴き声をまねて、班長が「ポー」と言うと班員は「ポッポー」と言うのである。こういう特別なサインを持っていると本当に絆を感じて班とみんなのことが大好きになった。

「今月の隊集会はハイキングだ。ヤマバト班が優秀班になれるように、今日の班集会で楽しく準備をしよう。」とキムラくんが言った。ぼくらは、班長の言葉で本当に優秀班になりたくて、どうしたら優秀班になれるのかを真剣に話し合った。

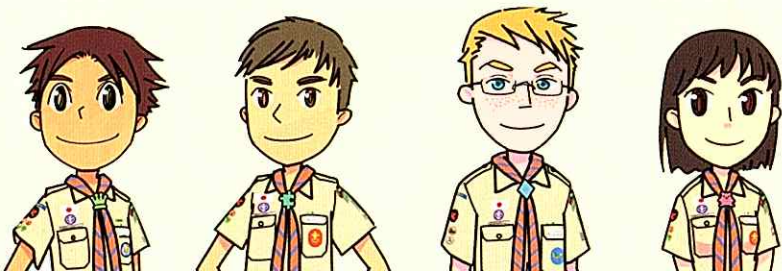
ぼくは、ヤマバト班の一員として班に誇りを持っている。

①キムラ班長

②ヒデト次長

③"アンドリュー"マコト

④エミ



⑤ミドリ

⑥シンイチ

⑦ヒサシ

⑧マサヒロ

